

鏡地獄

江戸川乱歩

青空文庫

「珍らしい話とおっしゃるのですか、それではこんな話はどうぞでしょう」

ある時、五、六人の者が、怖い話や、珍奇な話を、次々と語り合っていた時、友だちのKは最後にこんなふうにはじめた。ほんとうにあつたことか、Kの作り話なのか、その後、尋ねてみたこともないので、私にはわからぬけれど、いろいろ不思議な物語を聞かされたあとだったのと、ちょうどその日の天候が春の終りに近い頃の、いやにドンヨリと曇った日で、空気が、まるで深い水の底のように重おもしろく淀んで、話すものも、聞くものも、なんとなく気持ちがいめいた気分になっていたからでもあつたのか、そ

の話は、異様に私の心をうったのである。話というのは、

私に一人の不幸な友だちがあるのです。名前は仮りに彼と申して置きましようか。その彼にはいつの頃からか世にも不思議な病気が取りついたので。ひよつとしたら、先祖に何かそんな病気の人があつて、それが遺伝したのかもかもしれませんね。というのは、まんざら根のない話でもないので、いったい彼のうちには、おじいさんか、曾^{ひい}じいさんかが、切^{キリシタン}支丹の邪宗^{きえ}に帰依^{きえ}していたことがあつて、古めかしい横文字の書物や、マリヤさまの像や、基^{キリス}督^トさまのはりつけの絵などが、葛籠^{つづら}の底に一杯しまつてあるのですが、そんなものと一緒に、伊賀越道^{いがごえどう}中双六^{ちゆうしやうろく}に出てくるよ

うな、一世紀も前の望遠鏡だとか、妙なかつこの磁石だとか、
当時ギヤマンとかビイドロとかいったのでしようが、美しいガラ
スの器物だとかが、同じ葛籠にしまいこんであつて、彼はまだ小
さい時分から、よくそれを出してもらつては遊んでいたものです。
考えてみますと、彼はそんな時分から、物の姿の映る物、たと
えばガラスとか、レンズとか、鏡とかいうものに、不思議な嗜好
を持つていたようです。それが証拠には、彼のおもちやといえは、
幻灯器械だとか、遠目がねだとか、虫目がねだとか、そのほかそ
れに類した、将門まさかど目がね、万華鏡まんげきよう、眼めに当てると人物や道具
などが、細長くなつたり、平たくなつたりする、プリズムのおも
ちやだとか、そんなものばかりでした。

それから、やっぱり彼の少年時代なのですが、こんなことがあったのも覚えております。ある日彼の勉強部屋をおとずれますと、机の上に古い桐きりの箱が出ていて、多分その中にはいつていたのでしよう、彼は手に昔物の金属の鏡を持って、それを日光に当てて、暗い壁に影を映しているのです。

「どうだ、面おもしろ白いだらう。あれを見たまえ、こんな平らな鏡が、あすこへ映ると、妙な字ができるだらう」

彼にそう言われて、壁を見ますと、驚いたことには、白い丸形の中に、多少形がくずれてはいましたけれど「寿」という文字が、白金のような強い光で現われているのです。

「不思議だね、一体どうしたんだらう」

なんだか神業かみわざとでもいうような気がして、子供の私には、珍らしくもあり、怖くもあつたのです。思わずそんなふうに関き返しました。

「わかるまい。種明かしをしようか。種明かしをしてしまえば、なんでもないことなんだよ。ホラ、ここを見たまえ、この鏡の裏を、ね、寿という字が浮彫りになっているだろう。これが表へすき通るのだよ」

なるほど見れば彼の言う通り、青銅のような色をした鏡の裏には、立派な浮彫りがあるのです。でも、それが、どうして表面まですき通って、あのような影を作るのでしょうか。鏡の表は、どの方角からすかして見ても、滑らかな平面で、顔がでこぼこに写る

わけでもないのに、その反射だけが不思議な影を作るのです。まるで魔法みたいな気がするのです。

「これはね、魔法でもなんでもないのだよ」

彼は私のいぶかしげな顔を見て、説明をはじめたのでした。

「おとうさんに聞いたんだがね、金属の鏡というやつは、ガラスと違って、ときどきみがきをかけないと、曇りがきて見えなくなるんだ。この鏡なんか、ずいぶん古くから僕ぼくの家に伝わっている品で、何度となく磨みがきをかけている。でね、その磨きをかけるたびに、裏の浮彫りの所と、そうでない薄い所とでは、金の減り方が眼に見えぬほどずつ違ってくるのだよ。厚い部分は手ごたえが多く、薄い部分はこれが少ないわけだからね。その眼にも見えぬ

減り方の違いが、恐ろしいもので、反射させると、あんなに現われるのだそうだ。わかったかい」

その説明を聞きますと、一応は理由がわかったものの、今度は、顔を映してもでこぼこに見えない滑らかな表面が、反射させると明きらかに凹^{おうとつ}凸が現われるという、このえたいの知れぬ事実が、たとえば顕微鏡で何かを覗^{のぞ}いた時に味わう、微細なるものの無気味さ、あれに似た感じで、私をゾツとさせるのでした。

この鏡のことは、あまり不思議だったので、特別によく覚えていたのですが、これはただの一例にすぎないので、彼の少年時代の遊戯というものは、ほとんどそのような事^{こと}柄^{がら}ばかりで充^みたされていたわけです。妙なもので、私までが彼の感化を受けて、今

でも、レンズというようなものに、人一倍の好奇心を持っているのですよ。

でも少年時代はまだ、さほどでもなかったのですが、それが中学の上級生に進んで、物理学を教わるようになりますと、御承知の通り物理学にはレンズや鏡の理論がありますね、彼はもうあれに夢中になってしまつて、その時分から、病気と言ってもいいほどの、いわばレンズ狂に変わってきたのです。それにつけて思ひ出すのは、教室で凹面鏡のことを教わる時間でしたが、小さな凹面鏡の見本を、生徒のあいだに廻まわして、次々に皆の者が、自分の顔を映して見ていたのです。私はその時分ひどいニキビづらで、それがなんだか性欲的な事柄に関係しているような気がして、恥

かしくてしようがなかったのですが、なにげなく凹面鏡を覗いて見ますと、思わずアツと声を立てるほど驚いたことには、私の顔のひとつひとつのニキビが、まるで望遠鏡で見た月の表面のように、恐ろしい大きさに拡大されて映っていたのです。

小山とも見えるニキビの先端が、石榴ざくろのようにはせて、そこからドス黒い血のりが、芝居の殺し場の絵看板の感じで物もの凄すごくにじみ出しているのです。ニキビというひげ目があったせいでもありません。凹面鏡に映った私の顔がどんなに恐ろしく、無気味なものであったか、それからのちというものは、凹面鏡を見ると、それがまた、博覧会だとか、盛り場の見世物などには、よく並んでいるのですが、私はもう、おぞけを振るって、逃げ出すよ

うになつたほどです。

ですが、彼の方では、その時やっぱり凹面鏡を覗いて、これはまた私とあべこべで、恐ろしく思うよりは、非常な魅力を感じたものとみえ、教室全体に響き渡るような声で、「ホウ」と感嘆の叫びを上げたものなんです。それがあまり頓とんきよう狂きやうに聞こえたものですから、その時は大笑いになりましたが、さてそれからというものは、彼はもう凹面鏡で夢中なんです。小ささまの凹面鏡を買いこんで、針金だとかボール紙などを使い、複雑なからくり仕掛けをこしらえては、独りほくそ笑んでいる始末でした。さすが好きな道だけあって、彼は人の思いもつかぬような、変てこな装置を考案する才能を持っていて、もつとも手品の本などをわ

ざわざ外国から取り寄せたりしたのですけれど、今でも不思議に堪えないのは、これも或るとき彼の部屋をおとずれて、驚かされたのですが、魔法の紙幣というからくり仕掛けでありました。

それは、二尺四方ほどの、四角なボール箱で、前の方に建物の入口のような穴があいていて、そのところに一円札が五、六枚、ちようど状差しの中のハガキのように、差してあるのです。

「このおさつを取ってごらん」

その箱を私の前に持ち出して、彼は何食わぬ顔で紙幣を取れというのです。そこで、私はいわれるままに手を出して、ヒョイとその紙幣を取ろうとしたのですが、なんとまあ不思議なことには、ありありと眼に見えているその紙幣が、手を持って行ってみます

と、煙のように手ごたえがないではありませんか。あんな驚いたことはありませんね。

「オヤ」

とたまげている私の顔を見て、彼はさも面白そうに笑いながら、さて説明してくれたところによりますと、それは英国でしたかの物理学者が考案した一種の手品で、種はやっぱり凹面鏡なのです。詳しい理窟りくつはよく覚えていませんけれど、本ものの紙幣は箱の下へ横に置いて、その上に斜めに凹面鏡を装置し、電灯を箱の内部に引き込み、光線が紙幣に当たるようにすると、凹面鏡の焦点からどれだけの距離にある物体は、どういう角度で、どの辺にその像を結ぶという理論によって、うまく箱の穴へ紙幣が現われるの

だそうですね。普通の鏡ですと、決して本ものがそこにあるようには見えませんけれど、凹面鏡では不思議にもそんな実像を結ぶというのですね。ほんとうにもう、ありありとそこにあるのですからね。

かようにして、彼のレンズや鏡に対する異常なる嗜好は、だんだんと嵩じて行くばかりでしたが、やがて中学を卒業しますと、彼は上の学校にはいろいろともしないで、ひとつは親たちも甘過ぎたのですね、息子の言うことならば、たいていは無理を通してくれるものですから、学校を出ると、もうひとつかどおとなになった気で、庭の空き地にちよつとした実験室を新築して、その中で、例の不思議な道楽をはじめたものです。

これまでは、学校というものがあって、いくらか時間を束縛されていたので、それほどでもなかったのが、さて、そうして朝から晩まで実験室にとじこもることになりますと、彼の病勢は俄かに恐るべき加速度をもって昂進こうしんしはじめました。元来友だちの少なかった彼ですが、卒業以来というものは、彼の世界は、狭い実験室の中に限られてしまつて、どこへ遊びわすに出るといふでもなくしたがって来訪者もだんだん減つて行き、僅かに彼の部屋をおとずれるのは、彼の家の人を除くと、私ただ一人になつてしまつたのでした。

それもごく時たまのことですが、私は彼を訪問するごとに、彼の病気がだんだん募つて行つて、今ではむしろ狂氣に近い状態に

なっているのを目撃して、ひそかに戦慄せんりつを禁じ得ないのでした。彼のこの病癪にもつてきて、更らにいけなかつたことは、ある年の流行感冒のために、不幸にも彼の両親が、揃そろつてなくなつてしまつたものですから、彼は今は誰だれに遠慮の必要もなく、その上莫ばくだい大な財産を受けついで、思うがままに、彼の妙な実験を行なうことができるようになったのと、それに今ひとつは、彼も二十歳を越して、女というものに興味をいだきはじめ、そんな変てこな嗜好を持つほどの彼ですから、情欲の方もひどく変態的で、それが持ち前のレンズ狂と結びついて、双方がいつそう勢いを増す形になつてきたことでした。そしてお話というのは、その結果、ついに恐ろしい破局を招くことになつた或る出来事なのですが、そ

れを申し上げる前に、彼の病勢が、どのようにひどくなっていたかということ、二つ三つ、实例によつてお話しておきたいと思ふのです。

彼の家は山の手の或る高台にあつて、今いう実験室は、そのの広々とした庭園の片隅かたすみの、街々の藪いぢらかを眼下に見下す位置に建てられたのですが、そこで彼が最初はじめたのは、実験室の屋根を天文台のような形にこしらえて、そこに可なりかなりの天体観測鏡を据すえつけ、星の世界に耽溺たんできすることでした。その時分には、彼は独学で、一と通り天文学の知識を備えていたわけなのです。が、そのようなありふれた道楽で満足する彼ではありません。その一方では、度の強い望遠鏡を窓際まどぎわに置いて、それをさまざまの角

度にしては、目の下に見える人家の、あけはなつた室内を盗み見るといふ、罪の深い、秘密な楽しみを味わっているのでありました。

それがたとえ板堀いたべいの中であつたり、他の家の裏側に向かい合つていたりして、当人たちはどこからも見えぬつもりで、まさかそんな遠くの山の上から望遠鏡で覗かれていようとは気づくはずもなく、あらゆる秘密な行ないを、したい三昧ざんまいにふるまつている、それが彼には、まるで目の前の出来事のように、あからさまに眺めながられるのです。

「こればかりは、止よせないよ」

彼はそう言い言いしては、その窓際の望遠鏡を覗くことを、こ

よなき楽しみにしていました。考えてみれば、ずいぶん面白い
いたずらに違いありません。私も時には覗かしてもらうこともあ
りましたけれど、偶然妙なものを、すぐ目の前に発見したりして、
いつそ顔の赤らむようなこともないではありませんでした。

そのほか、たとえば、サブマリン・テレスコープといいますが、
潜航艇の中から海上を眺める、あの装置をこしらえて、彼の部屋
に居ながら、雇人たちの、殊ことに若い小間使いなどの私室を、少し
も相手に悟られることなく覗いてみたり、そうかと思うと、虫目
がねや、顕微鏡によつて、微生物の生活を観察したり、それにつ
いて奇抜なのは、彼が蚤のみの類を飼育していたことで、それを虫目
がねや度の弱い顕微鏡の下で、這はわせてみたり、自分の血を吸う

ところだとか、虫同士をひとつにして同性であれば喧嘩けんかをしたり、異性であれば仲良くしたりする有様を眺めたり、中にも気味のわるいのは、私は一度それを覗かされてからというものは、今までなんとも思っていないなかつたあの虫が、妙に恐ろしくなったほどなのですが、蚤を半殺しにしておいて、そのもがき苦しむ有様を、非常に大きく拡大して見ることでした。五十倍の顕微鏡でしたが、覗いた感じでは、一匹の蚤が眼界一杯にひろがって、口から、足の爪つめ、からだにはえている小さな一本の毛までがハッキリとわかって、妙な比喻ひゆですが、まるで猪いのししのように恐ろしい大きさに見えるのです。それがドス黒い血の海の中で（僅か一滴の血潮がそんなに見えるのです）背中半分をぺちやんこにつぶされて、手足で

空をつかんで、くちばしをできるだけ伸ばし、断末魔の物凄い形相をしています。何かその口から恐ろしい悲鳴が聞こえているようにすら感じられるのであります。

そうしたこまごましたことを一々申し上げていては際限がありませんから、たいていは省くことにしますが、実験室建築当初の、かような道楽は月日と共に深まって行つて、ある時はまた、こんなこともあつたのです。ある日のこと、彼を訪ねて、なにげなく実験室の扉をとびらひらきますと、なぜかブラインドをおろして部屋の中が薄暗くなっていました。その正面の壁一杯に、そうですね、一間四方もあつたでしょう。何かモヤモヤとうごめいているものがあるのです。気のせいかと思つて、眼をこすつてみるのです。

が、やっぱりなんだか動いている。私は戸口にたたずんだまま、息を呑のんでその怪物を見つめたものです。すると、見ているに従って、霧みたいなのがだんだんハッキリしてきて、針を植えたような黒い草むら、その下にギョロギョロ光っている鹽たらいほどの眼、茶色がかつた虹こうさい彩から、白目の中の血管の川までも、ちようどソフトフォーカスの写真のように、ぼんやりしていながら、妙にハッキリと見えるのです。それから棕櫚しゆろのような鼻毛の光る、ほら穴みたいな鼻の穴、そのままの大きさで座蒲団ざぶとんを二枚かさねたかと思える、いやにまっ赤な唇くちびる、そのあいだからギラギラと白い瓦かわらのような白歯が覗いている。つまり部屋一杯の人の顔、それが生きてうごめいているのです。映画などでないことは、その動き

の静かなのと、生物そのままの色いろつや艶とで明めいりよう瞭りようです。無気味さよりも、恐ろしさよりも、私は自分が気でも違ったのではあるまいかと、思わず驚きの叫び声を上げたほどです。すると、

「驚いたかい、僕ぼくだよ、僕だよ」

と別の方角から彼の声がして、ハッと私を飛び上がらせたことには、その声の通りに、壁の怪物の唇と舌が動いて、盥うのような眼が、ニヤリと笑ったのです。

「ハハハハハ……どうだいこの趣向は」

突然部屋が明かるくなつて、一方の暗室から彼の姿が現われました。それと同時に壁の怪物が消え去つたのは申すまでもありません。皆さんは大かた想像なすつたでしょうが、これはつまり実

物幻灯……鏡とレンズと強烈な光の作用によつて、実物そのままを幻灯に写す、子供のおもちやにもありますね、あれを彼独得の工夫によつて、異常に大きくする装置を作つたのです。そして、そこへ彼自身の顔を映したのです。聞いてみればなんでもないことですが、可なり驚かせるものですよ。まあ、こういつたことが彼の趣味なんですね。

似たようなので、いつそう不思議に思われたのは、今度は別段部屋が薄暗いわけでもなく、彼の顔も見えていて、そこへ変てこな、ゴチャゴチャとした鏡を立て並べた器械を置きますと、彼の眼なら眼だけが、これもまた盪ほどの大きさで、ポツカリと、私の目の前の空間に浮き出す仕掛けなのです。突然そいつをやられ

た時には、悪夢でも見ているようで身がすくんで、殆んど生きた空もありませんでした。ですが、種を割ってみれば、これがやっぱり、先ほどお話しした魔法の紙幣と同じことで、ただたくさん凹面鏡を使って、像を拡大したものにすぎないのです。でも、理窟の上ではできるものとわかっていても、ずいぶん費用と時間のかかることでもあり、そんなにはかばかしいまねをやってみた人もありませんので、いわば彼の発明といつてもよく、つづけざまにそのようなものを見せられると、なにかこう、彼が恐ろしい魔物のようにさえ思われてくるのでありました。

そんなことがあってから、二、三カ月もたった時分でしたが、彼は今度は何を思ったのか、実験室を小さく区ぎって、上下左右

を鏡の一枚板で張りつめた、俗にいう鏡の部屋を作りました。ドアも何もすつかり鏡なのです。彼はその中へ一本のロウソクを持って、たった一人で長いあいだはいつているというのです。一体なんのためにそんなまねをするのか誰にもわかりません。が、その中で彼が見るであろう光景は大体想像することができます。六方を鏡で張りつめた部屋のまん中に立てば、そこには彼のからだのあらゆる部分が、鏡と鏡が反射し合うために、無限の像となつて映るものに違いありません。彼の上下左右に、彼と同じ数限りもない人間が、ウジャウジャと殺到する感じに違いありません。考えただけでもゾツとします。私は子供の時分に八幡やわたの藪やぶ知らずしの見世物で、型ばかりの代物しろものではありましたが、鏡の部屋を経

験したことがあるのです。その不完全極まるものでさえ、私にはどのような恐ろしく感じられたことでしょう。それを知っているものですから、一度彼から鏡の部屋へはいれと勧められた時にも、私は固く拒んで、はいろいろとはしませんでした。

そのうちに、鏡の部屋へはいるのは、彼一人だけではないことがわかってきました。その彼のほかの人間というのは、彼のお気に入りの小間使いでもあり、同時に彼の恋人でもあったところの、当時十八歳の美しい娘でした。彼は口癖のように、

「あの子のたつたひとつの取柄とりえは、からだじゆうに数限りもなく、非常に深い濃こまやかな陰影があることだ。色艶も悪くはないし、肌はだも濃やかだし、肉付きも海獣のように弾力に富んではいるが、そ

のどれにもまして、あの女の美しさは、陰影の深さにある」

といっていた。その娘と一緒に、彼の鏡の国に遊ぶのです。しめきつた実験室の中の、それをまた区ぎつた鏡の部屋の中ですか、外部からうかがうべくもありませんが、時としては一時間以上も、彼らはそこにとじこもっているという噂うわさを聞きました。むろん彼が一人きりの場合もたびたびあるのですが、ある時などは、鏡の部屋へはいったまま、あまりにも長いあいだ物音ひとつしなないので、召使いが心配のあまりドアを叩たたいたといひます。すると、いきなりドアがひらいて、すっぱだかの彼一人が出てきて、ひとことも物をいわないで、そのままプイと母屋おもやの方へ行ってしまうたというような、妙な話もあるのです。

その頃から、もともとあまりよくなかった彼の健康が、日一日とそこなわれて行くように見えました。が、肉体が衰えるのと反比例に、彼の異様な病癖はますます募るばかりでした。彼は莫大な費用を投じて、さまざまの形をした鏡を集めはじめました。平面、凸面とつめん、凹面おうめん、波形、筒型と、よくもあんなに変わった形のものが集まったものです。広い実験室の中は、毎日かつぎ込まれる変形鏡で埋まってしまふほどでした。ところが、そればかりではありません。驚いたことには、彼は広い庭の中央にガラス工場を建てはじめたのです。それは、彼独特の設計のもので、特殊の製品については、日本では類のないほど立派なものであります。技師や職工なども、選びに選んで、そのためには、彼は残り

の財産を全部投げ出しても惜しくない意気込みでした。

不幸にも、彼には意見を加えてくれるような親戚しんせきが一軒もなかったのです。召使いたちの中には、見るに見かねて意見めいたことを言う者もありましたが、そんなことがあれば、すぐさまお払い箱で、残っている者共は、ただもう法外に高い給金目当ての、さもない連中ばかりでした。この場合、彼に取っては天にも地にも、たった一人の友人である私としては、なんとか彼をなだめて、この暴挙をとめなければならなかったのですが、むろん幾度となくそれは試みたのですが、いつかな狂気の彼の耳には入らず、それに事柄ことがらが別段悪事というのではなく、彼自身の財産を、彼が勝手に使うのであってみれば、ほかにどう分別のつけようもない

のでした。私はただもう、ハラハラしながら、日に日に消え行く彼の財産と、彼の命とを、眺めているほかはないのでした。

そんなわけで、私はその頃から、かなり足あししげ繁しげく彼の家に出入りするようになりました。せめては彼の行動を、監視なりともしていようという心持だったのです。従って、彼の実験室の中で、目まぐるしく変化する彼の魔術を、見まいとしても見ないわけには行きませんでした。それは実に驚くべき怪奇と幻想の世界でありました。彼の病癪が頂上に達すると共に、彼の不思議な天才もまた、残るところなく発揮されたのでありましょう。走馬灯のように移り変わる、それがことごとくこの世のものではないところの、怪しくも美しい光景、私はその当時の見聞を、どのような言

葉で形容すればよいのでしよう。

外部から買入れた鏡と、それで足らぬところや、ほかでは仕入れることのできない形のもは、彼自身の工場で製造した鏡によつて補い、彼の夢想は次から次へと実現されて行くのでした。あの時は彼の首ばかりが、胴ばかりが、或いは足ばかりが、実験室の空中を漂っている光景です。それは言うまでもなく、巨大な平面鏡を室一杯に斜めに張りつめて、その一部に穴をあけ、そこから首や手足を出している、あの手品師の常套手段にすぎないのですけれど、それを行なう本人が手品師ではなくて、病的なきまじめな私の友だちなのですから、異常の感にうたれないではいられません。ある時は部屋全体が、凹面鏡おうめん、凸面鏡とつめん、波型鏡、

筒型鏡の洪水こうずいです。その中央で踊り狂う彼の姿は、或いは巨大に、或いは微小に、或いは細長く、或いは平べったく、或いは曲がりくねり、或いは胴ばかりが、或いは首の下に首がつながり、或いはひとつの顔に眼が四つでき、或いは唇が上下に無限に延び、或いは縮み、その影がまた互に反復し、交錯して、紛然雜然、まるで狂人の幻想です。

ある時は部屋全体が巨大なる万華鏡まんげきようです。からくり仕掛けで、カタリカタリと廻まわる、数十尺の鏡の三角筒の中に、花屋の店をからしにして集めてきた、千紫万紅が、阿片あへんの夢のように、花卉一枚の大きさが畳一畳にも映ってそれが何千何万となく、五色の虹にじとなり、極地のオーロラとなって、見る者の世界を覆おおいつくす。そ

の中で、大入道の彼の裸体が月の表面のような、巨大な毛穴を見せて躍り狂うのです。

そのほか種々雑多の、それ以上であつても、決してそれ以下ではないところの、恐るべき魔術、それを見た刹那^{せつな}、人間は気絶し、盲目となつたであらうほどの、魔界の美、私にはそれをお伝えする力もありませんし、またたとえ今お話してみたところで、どうまあ信じていただけましょう。

そして、そんな狂乱状態がつづいたあとで、ついに悲しむべき破滅がやってきたのです。私の最も親しい友だちであつた彼は、とうとう本ものの気ちがいになつてしまつたのです。これまでも、彼の所業は決して正気の沙汰^{さた}とは思われませんでした。し

かし、そんな狂態を演じながらも、彼は一日の多くの時間を常人のごとく過ごしました。読書もすれば、や瘦せさらばうた肉体を駆使して、ガラス工場の監督指揮にも当たり、私と会えば、昔ながらの彼の不可思議なる唯美思想ゆいびを語るのに、なんのさしさわりもないのでした。それが、あのような無慙むごんな終末をとげようとは、どうして予想することができましょう。おそらく、これは彼の身うちに巢食つていた悪魔の所業か、そうでなければ、あまりにも魔界の美に耽溺たんできした彼に対する、神の怒りでもあったのでしようか。

ある朝、私は彼の所からの使いのものに、あわただしく叩き起こされたのです。

「大へんです。奥様が、すぐにおいでくださいますようにとおっしゃいました」

「大へん？ どうしたのだ」

「私どもにはわかりませんのです。ともかく、大急ぎでいらしつていただけませんかでしょうか」

使いの者と私とは、双方とも、もう青ざめてしまつて、早口にそんな問答をくり返すと、私は取るものも取りあえず、彼の屋敷へと駈^かけつきました。場所はやっぱり実験室です。飛び込むように中へはいると、そこには、今では奥様と呼ばれている彼の愛人の小間使いをはじめ、数人の召使いたちが、あつけに取られた形で、立ちすくんだまま、ひとつの妙な物体を見つめているのでし

た。

その物体というのは、玉乗りの玉をもう一とまわり大きくしたようなもので、外部には一面に布が張りつめられ、それが広々と取り片づけられた実験室の中を、生あるもののように、右に左にころがり廻っているのです。そして、もつと気味わるいのは、多分その内部からでしょう、動物のとも人間のともつかぬ笑い声のような唸^{うな}りが、シューシューと響いているのでした。

「一体どうしたというのです」

私はかの小間使いをとらえて、先^まずこう尋ねるほかはありませんでした。

「さっぱりわかりませんの。なんだか中にいるのは旦那様^{だんなさま}では

ないかと思うのですけれど、こんな大きな玉がいつの間に来たのか、思いもかけぬことですし、それに手をつけようにも、気味が変わるくて……さつきから何度も呼んでみたのですけれど、中から妙な笑い声しか戻もどってこないのですもの」

その答えを聞くと、私はいきなり玉に近づいて、声の洩もれてくる箇所を調べました。そして、ころがる玉の表面に、二つ三つの小さな空気抜きとも見える穴を見つけるのは、わけのないことでした。で、その穴のひとつに眼を当てて怖わごわ玉の内部を覗のぞいて見たのですが、中には何か妙に眼をさすような光が、ギラギラしているばかりで、人のうごめくけはいと、無気味な、狂気めいた笑い声が聞こえてくるほかには、少しも、様子がわかりません。

そこから二、三度彼の名を呼んでもみましましたけれど、相手は人間なのか、それとも人間でないほかの者なのか、いつこうに手ごたえがないのです。

ところが、そうしてしばらくのあいだ、ころがる玉を眺^{なが}めているうちに、ふとその表面の一方所に、妙な四角の切りくわせができていたのを発見しました。それがどうやら、玉の中へはいる扉らしく、押せばガタガタ音はするのですけれど、取手^{とって}も何もないために、ひらくことができません。なおよく見れば、取手の跡らしく、金物の穴が残っています。これは、ひよつとしたら、人間が中へはいったあとで、どうかして取手が抜け落ちて、そこから、中からも、扉がひらかぬようになったのではあるまいか。と

すると、この男はひと晩じゆう玉の中にとじこめられていたことになるのでした。では、その辺に取手が落ちていまいかと、あたりを見廻しますと、もう私の予想通りに違いなかったことには、部屋の一方の隅すみに丸い金具が落ちていて、それを今の金物の穴にあててみれば、寸法はきつちりと合うのです。しかし困ったことには、柄えが折れてしまっていて、今さら穴に差し込んでみたところで、扉がひらくはずもなかったのでした。

でも、それにしてもおかしいのは、中にとじこめられた人が、助けを呼びもしないで、ただゲラゲラ笑っていることでした。

「もしや」

私はある事に気づいて、思わず青くなりました。もう何を考え

る余裕ありません。ただこの玉をぶちこわす一方です。そして、
ともかくも中の人間を助け出すほかはないのです。

私はいきなり工場に駆けつけて、大ハンマーを拾うと、元の部
屋に引き返し、玉を目がけて勢いこめてたたきつけました。と、
驚いたことには、内部は厚いガラスでできていたと見え、ガチャ
ンと、恐ろしい音と共に、おびただしい破片に、割れくずれてし
まいました。

そして、その中から這^はいだしてきたのは、まぎれもない私の友
だちの彼だったのです。もしやと思っていたのが、やっぱりそう
だったのです。それにしても、人間の相^{そうごう}好^{わす}が、僅^{わずか}か一日のあい
だに、あのようにも変わるものでしょうか。きのうまでは、衰え

てこそいましたけれど、どちらかといえは、神経質に引き締まった顔で、ちよつと見ると怖いほどでしたのが、今はまるで死人の相好のように、顔面のすべての筋がたるんでしまい、引つかき廻したように乱れた髪の毛、血走っていないながら、異様に空ろな眼、そして口をだらしなくひらいて、ゲラゲラと笑っている姿は、二た目と見られたものではないのです。それは、あのように彼の寵ちよ愛あひを受けていた、かの小間使いさえもが、恐れをなして、飛びのいたほどでありました。

いうまでもなく、彼は発狂していたのです。しかし、何が彼を発狂させたのでありましょう、玉の中にとじこめられたくらいで、気の狂う男とも見えません。それに第一、あの変てこな玉は、一

体全体なんの道具なのか、どうして彼がその中へはいつていたのか。玉のことは、そこにいた誰だれもが知らぬというのですから、おそらく彼が工場に命じて秘密にこしらえさせたものでありましようが、彼はまあ、この玉乗りのガラス玉を、一体どうするつもりだったのでしょうか。

部屋の中をうろうろしながら、笑いつづける彼、やっと気を取り直して、涙ながらに、その袖そでを捉とらえる女、その異様な興奮の中へ、ヒョッコリ出勤してきたのは、ガラス工場の技師でした。私はその技師をとらえて彼の面喰めんくらうのも構わずに、矢つぎ早やの質問をあびせました。そして、ヘドモドしながら彼の答えたところを要約しますと、つまりこういう次第だったのです。

技師は大分以前から、三分ほどの厚みを持った、直径四尺ほどの、中空のガラス玉を作ることを命じられ、秘密のうちに作業を急いで、それがゆうべ遅くやっとできあがったのでした。技師たちはもちろんその用途を知るべくありませんが、玉の外側に水を塗って、その内側を一面の鏡にすること、内部には数力所に強い光の小電灯を装置し、玉の一カ所に人の出入りできるほどの扉とびらを設けること、というような不思議な命令に従って、その通りものを作ったのです。できあがると、夜中にそれを実験室に運び、小電灯のコードには室内灯の線を連結して、それを主人に引き渡したまま帰宅したのだと申します。それ以上のことは、技師にはまるでわからないのでした。

私は技師を帰し、狂人は召使いたちに看護を頼んでおいて、その辺に散乱した不思議なガラス玉の破片を眺めながら、どうかして、この異様な出来事の謎なぞを解こうと悶もだえました。長いあいだ、ガラス玉との睨にらめっこでした。が、やがて、ふと気づいたのは、彼は、彼の智力の及ぶ限りの鏡装置を試みつくし、楽しみつくして、最後に、このガラス玉を考案したのではあるまいか。そして、自からその中にはいつて、そこに映るであろう不思議な影像を、眺めようと試みたのではあるまいかということでした。

が、彼が何故なぜ発狂しなければならなかったか。いや、それよりも、彼はガラス玉の内部で何を見たか。一体全体、何を見たのか。そこまで考えた私は、その刹那せつな、脊髄せきずいの中心を、氷の棒で貫か

れた感じで、その、世の常ならぬ恐怖のために、心の臓まで冷たくなるのを覚えました。彼はガラス玉の中にはいつて、ギラギラした小電灯の光で、彼自身の影像をひと目見るなり、発狂したのか、それともまた、玉の中を逃げ出そうとして、誤まって扉の取手を折り、出るに出られず、狭い球体の中で死の苦しみをもがきながら、ついに発狂したのか、そのいずれかではなかったでしょうか。では、何物がそれほどまでに彼を恐怖せしめたのか。

それは、到底人間の想像を許さぬところです。球体の鏡の中心にはいった人が、かつて一人だつてこの世にあつたでしょうか。その球壁に、どのような影が映るものか、物理学者とて、これを算出することは不可能でありましょう。それは、ひよつとしたら、

われわれには、夢想することも許されぬ、恐怖と戦せんりつ慄いんがいの人外きょう境きょうではなかつたのでしようか。世にも恐るべき悪魔の世界ではなかつたのでしようか。そこには彼の姿が彼としては映らないで、もつと別のもの、それがどんな形相を示したかは想像のほかですけれども、ともかく、人間を発狂させないではおかぬほどの、あるものが、彼の限界、彼の宇宙を覆いつくして映し出されたのでありますまいか。

ただ、われわれにかろうじてできることは、球体の一部であるところの、凹面鏡の恐怖を、球体にまで延長してみるほかにはありません。あなた方は定めし、凹面鏡の恐怖なれば、御存じであります。あの自分自身を顕微鏡にかけて覗いて見るような、

悪夢の世界、球体の鏡はその凹面鏡が果てしもなく連なって、われわれの全身を包むのと同じわけなのです。それだけでも、単なる凹面鏡の恐怖の幾層倍、幾十層倍に当たります。そのように想像したばかりで、われわれはもう身の毛もよだつではありませんか。それは凹面鏡によって囲まれた小宇宙なのです。われわれの世界ではありません。もつと別の、おそらく狂人の国に違いないのです。

私の不幸な友だちは、そうして、彼のレンズ狂、鏡気ちがいの最端をきわめようとして、きわめてはならぬところを極めようとして、神の怒りにふれたのか、悪魔の誘いに敗れたのか、遂に彼自身を亡^{ほろ}ぼさねばならなかったのでありましょう。

彼はその後、狂ったままこの世を去ってしまいましたので、事の真相を確かむべきですがとてもありませんが、でも、少なくとも私だけは、彼は鏡の玉の内部を冒したばかりに、ついにその身を亡ぼしたのだという想像を、今に至るまでも捨て兼ねているのであります。

青空文庫情報

底本：「江戸川乱歩傑作選」新潮文庫、新潮社

1960（昭和35）年12月24日発行

1989（平成元）年10月15日48刷改版

2013（平成25）年6月10日99刷

初出：「大衆文芸」

1926（大正15）年10月

※「みがき」と「磨き」、「ところ」と「所」、「もって」と「持って」、「きわめよう」と「極めよう」の混在は、底本通りです。

入力：isizuka

校正：岡村和彦

2016年9月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鏡地獄

江戸川乱歩

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>